

籠祇王

ワキ 粉川の何某

シテ 白拍子祇王

ツレ 祇王従者

ヲカシ 粉川従者

尉 祇王父

地は 紀伊粉河

季は 春三月

「是は紀州粉河の何がしにて候。さても此隣郷に。林の何がしと口論し。敵味方に討ち討たるゝ事数を知らず。分捕少々生捕の人数も候。其中に未だ若き者を一人召し捕り籠者させ。此処の地下人に預け番を据ゑ置きて候ふ処に。何とかしたりけん。過ぎし夜のがして候。口惜しさ申すばかりなく候。自然籠守頼まれて落す事もや有るべきと存じ。其時の番の者を籠者させて候ふ間。番の事か

たく申し付けばやと存じ候。如何に誰かある。籠番よくく仕り候へ。又囚人のゆかりなどゝて来り候ふとも。対面は堅く禁制にてある間。其分心得候へ。

「旅だつ空のあさもよい。く。紀の路にいざや急がん。

「是は此程都に住む。祇王と申す女にて候。我遊女の道をたしなみ。色香にうつる花鳥の。声の綾織

る旗薄の。いと珍らかに初月の。雲井にも名を残す身の。花の都の住居かな。

詞

「又此程清水に籠りて候へば。鄙の住居に年よりたる父を持ちて候ふが。何事の科やらん。所の主より召こめられ。籠者とやらん聞え候ふ程に。余りの事の悲しさに。老の親とてさなきだに。別れの近き世の中に。如何なる罪にか沈み給はん。急ぎ下りて今一目。見参らせばやと思ひつゝ。

カ
ル

「春の霞と立ち出でゝ。都の月の夜深きに。淀の舟戸に出でにけり。く。

上
歌

「散りにし花の山風の。く。鵜殿の蘆の露わけて。旅衣。禁野の雪をたどり行く。交野の御野の桜狩。雨は降りきぬ同じくは。ぬるとも陰に宿らん。ぬるゝとも陰にやどらん。月住吉の西の海。はるかに見えて沖つ波。互にかゝる夕雲の。和泉の国に着きしかば。信田の森の葛の葉も。まだ下萌は春

草の。野山を分けて紀の国や。粉河の里に着きに
けり。く。

シテ「急ぎ候ふ程に。是は早粉河の里に着きて候。父御
のありかを尋ねて御入り候へ。

ツレ「心得申して候。如何に此内へ案内申し候。

ヲカシ「シカく。

ツレ「さん候是に渡り候ふ御方は。都に住む祇王と申す
人にて御入り候ふが。籠者の人のためには御子に

て候ふが。父御に今一度御対面ありたきとて。是
まで遙々御下り候ふ間。恐れながらそと引合せて
給はり候へ。

ヲカシ「シカく。

ツレ「仰はさる御事にて候へども。女の事にて候ふ程に。
御心得を以て御引合せ候ひて給はり候へ。

ヲカシ「シカく。

ツレ「心得申して候。

ヲカシ「シカく。」

ワキ「惣じて囚人のゆかりの者として来りたる者に。対面は堅く禁制にて候ふに。何とて其由申し候はぬぞ。

ヲカシ「シカく。」

ワキ「其儀ならば。先づ某対面せうずるにて候。某に対面と仰せ候ふ人は何くに渡り候ふぞ。

シテ「恥かしながらわらはにて候。

ワキ「さては御身にて御座候ふか。惣じて囚人のゆかり

などゝて参りたる者を。籠者の者にも。又某にも対面の事は堅く禁制にて候へども。祇王御前の御事は。天下にかくれもなき舞の上手にて候ふ程に。舞を舞うて御見せ候はゞ。大法を破つて父御に引合せ申さうずるにて候ふ間。舞をまうて御見せ候へ。

シテ「何とわらはに舞をまへと仰せ候ふか。

ワキ「中々の事。

シテ「悲しやな親子の契りの対面なるを。舞はじ申さば父に逢ふ事かなふまじければ。仰には従ふべけれども。先づく父に引合せて給はらば。其後舞を舞はうずるにて候。

ワキ「尤ことわりにて候。さあらばまづく引合せ申さうずる間。其後舞をまうて御見せ候へ。如何に誰かある。

ワキ「さあらば此人を籠者の人に引合せ申し候へ。

尉

「籠鳥雲を恋ひ帰雁友を失ふ心。それは鳥類にこそ聞きしか。人間に於てかくばかり。故郷を去り友を忍びて。身にかぎるかの浮世の中。たゞ前生の因果を思ふのみなり。南無や大慈大悲の観世音。福寿海無量の誓ひのまゝに。善所に迎へ取り給へ。如何に父御前。祇王こそ是まで参りて候へ。まづ御有様を見奉れば。言の葉よりも涙先だち。更に心も心ならぬぞや。あら浅ましや候。

尉「あら不思議や。御身は何とて是までは来りたるぞ。

シテ「さん候父御の御祈りのために。此程清水にこもり
て候へば。何事やらん父御前は科人となりて。籠
者とやらん聞え候ふ程に。かちはだしにて是まで
参りて候。さて御科は如何なる事にて候ふぞ。

尉「此年になりて何事の科をなし。かく籠者するぞと
思ひ給ふはことわりなれども。是は人の命にかは
りたる事にて候。

シテ「さらば委しく御物語り候へ。

尉「さても当国に合戦あつて。敵味方に討たるゝ事数
を知らず。又生捕の人数も少々ありし中に。年若
き侍を此籠に入れおかれ。いまだ陣中の事にて有
りし程に。此所の地下人に預け番をすゑ。籠を守
らせらるゝ所に。此尉が番に当りし時。彼人をよ
くく見れば。いまだ眼前の若き人なるが。然も
此たびの叛人にてあらず。よそよりの合力の人

数なり。其時我おもふやう。あら痛はしや人の上に思ふだにも痛はしく。さこそ親親類の嘆き給ふらんとよく／＼思へば。人を助けば菩薩の行ひ。たとひ此人を失ひたる科により。死罪には行はるゝとも。助けばやと思ふ一念骨髓に通つて。或夜この籠をひらき。彼者を落す。されば囚人を失ひたる科のがれがたくて。やがて此尉を切らるべきに定まりしが。まづ／＼籠に入れおかれ。もし囚人

のゆくへや聞くとて。今までは切られねども。今は早切らるべきに定まりて。今日の夕べと聞え候ふ処に。嬉しくも来り給ふ物かな。跡の取りおき最期の仕儀といひ。あまりにたよりもなかりつるに。御身の来り給ふを見て。二世安樂の心まで出で来て候へ。さりながら不覚の涙のこぼれ候。

シテ「さては人を助け給ひたる御科ならば。かへつて喜びにやなるべし。慈眼視衆生の力を頼み。観音を

念じ給ふべし。

尉「げにくは是はさる事なれども。今は命も惜しからず。たゞ願はしきは後世菩提。

シテ「げにくは是も御身のためには。御ことわりとは思へども。我ばかりなる親子の中。

尉「此一世こそ限りなるを。

シテ「此世をだにも添ひ果てもせで。

尉「せめては生老病死の内。

シテ「病苦をも受けず。

地「死をも待たで。

二人「劍の先にかゝらん事。前世に誰をか害しけるぞや。

地「のがれえぬ。報いを我に老の身のく。又此後は誰が世の。親子となりて生るべき。是につけても只今の。親と子の。一世の縁ぞ限りなる。さりとは我たのむ。大慈大悲の観世音。後の世助けおはしませ。く。

ワキ 「如何に祇王御前舞を御まひ候へ。

シテ 「さん候父の御ありさまを見るに。涙にかきくれて
更に舞ふべき便りなし。然るべくは御ゆるし候へ。

ワキ 「不思議なる事を仰せ候ふ物かな。さては我等を御
たばかり候な。

尉 「如何に祇王。何事を申すぞ。

ワキ 「いや聞き給へ。是なる女性の名をば祇王と申し候
ふが。尉殿のためには息女と御名乗り候ひて。囚

人に対面ありたきよし仰せられし程に。対面の事
は堅き禁制にて候へども。承り及びたる一曲一かな
でも見申してあらば。大法を破り囚人に対面さ
せ申すべきよし申して候へば。さらば対面有つて
後。舞を舞はうずるよし仰せられ候ひて。今は舞
ふまじき由仰せ候ふ程に。皆々腹立仕り候。

尉 「尤御ことわりにて候。如何に祇王何とて辞し申す
ぞ。本より此一曲はさる方よりも密かに伝へたり

しを。御身に相伝したる事なれば。父が最期の光陰にも。歌舞の菩薩の妙音たるべし。はや／＼歌ひ給ふべし。

シテ「此上はとかく申すによしぞなき。歌はずは身の科といひ。又は父御の仰せなれば。涙をおさへ心を沈めて。

尉「父も昔を思出の。涙ながらに拍子をすゝめ。
シテ「曲をいたして呂律の一つの。

尉「悲しみの声を便りとして。

シテ「是ぞかぎりの親子の中。

尉「名残を見せて。

シテ「花の袖。

地「雪をめぐらす袂より。／＼。涙の雨やまさるらん。

シテ「何事も世の有様は夢なれや。

地「うつゝなき今のけしきかな。

尉「げにや遂にゆく道とはかねて知りながら。

シテ「昨日今日とは白雲の。

尉「朝に立ちて。

シテ「夕に消ゆる。

地「電光朝露の。影の内外に遊ぶかな。胡蝶の舞の花の袖。あはれなる心もて。花にと歌ひかなでん。げにや世の中に。独とゑまるものあらば。もし我かはと身をや頼まんと。げにことわりや我ながら。只今別るべき。たらちをの亡き跡に。残らん

事も幾程の。世に空蟬の唐衣。うすき契は親と子の。一世に限る夢の内を。思へたゞ。朝顔の日影まつ間の花ざかり。

シテ「いつまでか長柄の橋のながらへて。

地「かゝる浮世を渡らんと。思ふにつけても。恨めしきは命なり。げにや世に住むは。うきこそまされ三吉野の。岩の崖道。ふみならし行く水の。あはれくなる。父の事ぞ悲しき。つらく無常を觀

ずるに。飛花落葉の秋の風。風月延年の遊樂も。
狂言綺語のいつてん。讃仏乗の因縁まで。津の国
の難波の事か法ならぬ。遊び戯れかずくの。

シテ「声仏事をなしてこそ。

地「父のゆくべき終の道の。くらき暗をもともし火の。

光のかげもあきらけき。真如安樂のかの国に。迎
へ給へとさながらに。歌舞の菩薩の光臨と。懇ろ
に念願し。是までなれや今は早。烏帽子直垂ぬぎ

すてゝ。籠のとぼそに取りつきて。さめぐと泣
き居たり。又さめぐと泣きるたり。

シテ「あら悲しやみづからを失ひて。父御を助けてたび
給へ。

ワキ「是は不思議なる事を仰せ候ふ物かな。たとひ男子
の身なりとも。人の命にかはる事あるべからず。
しかも女性の御身にて。思ひもよらぬ事にて候。

尉「如何に祇王。何を歎くぞ。今は歎をとめて。父

が最期の十念をすゝむべきを。悲しむ事あるべからず。是なる数珠は黒谷の。法然上人より給はりたる御数珠なり。是をおことに与ふるなり。父が形見と思はん時。念仏申し跡を弔ひて得させ候へ。シテ「さん候此御数珠にて念仏申し。御跡とむらひ参らせ候ふべし。又是なる御経は。此程父の御ために。身を離さずよみたる御経なり。種々諸悪趣の誓ひのまゝに。必ず成仏なり給はゞ。同じ蓮台に参り

あふべしと。

二人「数珠と御経をとりちがへ。南無や大悲の観世音。

地「慈悲の眼の光にて。臨終を守り給へや。

ワキ「あまりに時刻もうつりゆけば。かの老人の首討たんと。太刀ふりあぐればこは如何に。御経の光眼にふさがり。取り落したる太刀を見れば。二つになりて段々となる。こはそも如何なる事やらん。

二人「父も祇王も之を見て。命終らん事をも分ず。たゞ

茫然とあきれ居たり。

ワキ 「いや／＼何を疑ひ給ふ。只今読誦の御経の文は。

取り分け念彼の段。取り上げ見れば疑ひなく。

二人 「或遭王難苦。

ワキ 「臨刑欲寿終。

二人 「念彼觀音力。

ワキ 「刀尋。

二人 「段々壞。

地 「げに有難や此文は。王難に逢ふとても。劍段々に

折れなんの。経文は疑はず。あら有難の御経や。

キリ 「此上は老人よ。／＼。はや助くるぞ歸れとの。御

ゆるされにあづかれば。祇王は父を引き立てゝ。

悦びの道に歸りけり。げに頼みても頼むべきは。

是れ觀音の誓ひかな。／＼。